

## 令和2年度 第5回がまごおり協働まちづくり会議議事要旨

日 時 令和3年3月23日（火）

午後1時30分～

Web会議システム（Zoom）にて実施

### 1 開会

蒲郡青年会議所役員改選により、まちづくり委員交代  
配布資料の確認、欠席者（遅刻者）について説明

### 2 議題

#### （1）助成金事業について

- ・令和3年度がまごおり市民企画公募まちづくり事業助成金事業審査結果について、はじめの一步部門応募件数0件、活動ステップアップ部門応募件数2件であった。はじめの一步部門においては、まちづくりセンターへ相談はあったが、来年度事業として申請には至らなかった。
- ・活動ステップアップ部門には、がまごおり地域猫の会、蒲郡若者議会運営委員会より応募があり、オンラインにて審査を行った。
- ・プレゼンを7分、審査員による質疑を8分と設定した。実際に参加した審査員の感想では、プレゼンはちょうどよい長さだが、質疑をする時間が短いという意見があった。
- ・ただし、オンライン審査の方が通常の審査会よりも、質疑や意見交換が活発にできたように感じたという審査員からの意見もあった。
- ・その中で審査員より「0か100か」という審査方法はいかかなものか、という意見があった。現在の審査では、審査に合格すると申請額の100%助成、不合格であると0となる。要綱には「助成対象となるかどうかは、個別に経費の内容を審査する」とするため、0か100かではなくてよいのだが、慣例でこのようになっている。
- ・助成事業の中間報告会や座談会のような場があってもよいのではという意見があった。
- ・令和3年度においても、はじめの一步部門において随時募集を行うのはどうか。6月中旬、8月初旬の2回募集締切を設けるのはどうか。
- 活動ステップアップ部門の事業申請・採択が久しぶりであり、だからこそ審査会においてどうだったかというのを振り返る必要がある。次回以降の会議において、意見をうかがっておきたい。金額が大きい分、精査した方がよいのかなと感じる。
- 自治体によっては、減額して認めるというところもあるし、審査の時に付いた点数に応じて助成する場合もある。
- 今回は、はじめの一步部門で経験を積んだ後の活動をステップアップ部門で挑戦、という訳ではない。それを踏まえると、はじめの一步部門と活動ステップアップ部門で助成上限金額に差（10万円と100万円）が開いているというのも気になる。
- 活動ステップアップ部門に申請した団体が、はじめの一步部門に必ずしもエントリーしてはならない。
- 蒲郡で助成金を受けた団体が、4月に社会福祉法人となる。市民事業を育て

- ていくという目的では、ある程度のまとまった金額が必要と議論されていた。ただし、市民の活動に助成するのか、市民の事業に助成するのかっていう点においては、今後も検討していく必要がある。
- 協働まちづくり課ができた時に、地域コミュニティの連携という話が出てきた。ただし、横のつながりを作っていく時に全て事業に繋げるのは難しいと判断された。事業だけでなく、活動においても整理する必要があるのかと感じた。
  - そういった活動の多面性においても、指針的なものに落とし込んでいく必要がある。
  - 市民団体の活動が契機となって、行政で事業化される例もある。活動を行いながら、どこが取り組むべきかを考えていくことも大切。
  - はじめの一步部門、随時募集についてはどうか？活動ステップアップ部門で採択された、がまごおり地域猫活動と蒲郡若者議会の活動をヒントに「自分だったらこんなことができそう」と考える方もいるかもしれない。あるいは、若者議会の中から、自分たちでグループを作り取組が起きるなど波及効果があるかもしれない。
  - チャンスは多い方がよいので賛成。
  - 自分にもチャンスがあるかもしれない。機会が多いとよいと思う。
  - 自分はNPOに所属しており、他で助成金を受けたことがある。満額は無理でも●●%なら助成可能というものがあつた。また、お金は難しいが物品なら提供できるなどもあつた。活動の状況によって、配慮してもよいと思う。
  - 過去安城で地域猫活動が、取り組まれたことがある。ただし、最初に取り組んだ方が熱心にやりすぎて、燃え尽きてしまった例もあつた。地域コミュニティなどいろいろな団体と連携したりする必要がある。また去勢手術をすることが原則なので、行政も補助金などでサポートしていた。次の世代の方が、頑張つて取り組まれている。
  - 今回の審査でも、団体がどのように自立していくのか、地域との関わりはどうするのかという視点が議論に上がった。
  - はじめの一步部門は上限10万円だが、それ以下で申請可能か？
  - 1万円以上なら可能。
  - 少額からできるので、事業で大きな構想を練らなくても大丈夫。活動ステップアップ部門でも上限は100万円だが、10万円、15万円、20万円といった申請でも可能。ハードルが高くないと伝える必要がある。
  - また、予算額よりも多くの申請が出てきてしまった場合、どう対処するのかも検討して置く必要がある。

## (2) モデル事業について

### ○SDGs 理解講座について

- ・3/7に「超わかりやすいSDGs理解講座」を開催。参加者25名で、講師がSDGsと市民活動の関わりについて説明。参加者より「自分の活動が様々な課題とつながっていると感じた」と感想があつた。
- ・10日後にフォローアップ交流会を実施。12名が参加し、SDGsに対する意識が高く、自分達の活動をどうSDGsに結びつけていくか話し合った。
- ・図書館の司書さんが参加してくれ、SDGsの図書の貸し出しがあると教えて

くれた。

- ・SDGsについては次年度においても、勉強会を開催していきたいと考えている。
- 活動にSDGsをあてはめることで、自分がなにに重きを置いているのかが見えてくる。熱意とか今後の方向性もイメージしやすいのかなと思った。
- 他団体の活動を聞いても「へ～、そうなんだ」で終わってしまっていたが、その活動自体がなんの目標に該当するのかが見えてくる。そうなるに関わってくれる人に応じて、新たな事業に発展したり、既存の事業に+αとして加えることができそう。
- なにかカフェとかサロンといったたまり場が必要ではないかと感じる。今の活動自体をSDGsの17の目標にあてはめると、次なる目標も見えてくる。
- 目標を定め、それに対して新たな人が加わることで相乗効果が期待できる。
- SDGsっていう言葉を市の総合計画の資料で初めて知った。内容を知ってくると、自分たちの活動が色々な目標に関わってくるっていうことを改めて認識することができている。
- 岩倉市の事例を聞いて、若い男性10人ぐらいでスタートしたというのに驚いた。市長、議員、行政を巻き込んで活動しており、蒲郡市でもできないかと感じた。グループワークでは、少し立ち返って地域や身の回りを充実させることが、色々なことに関わってくるという話をした。
- 市民活動でいうと自分達の目標がなんなのかを他の参加者と共有しやすくなることが、SDGsを学ぶ上でのメリットと感じる。
- 17の目標のどれかが団体の活動に関わっているもの。そのため、参加者も自分にあてはめることができ、話しやすく集う機会を作りやすいと感じる。
- SDGsは色々な切り口がある。半田市では、SDGsに興味のある企業と学生をマッチングする取り組みがある。ただし、みんながSDGsを意識して活動しているだけでなく、講座や総合計画などあるきっかけを元に学びだしてもよい。
- 蒲郡市では、SDGsの考え方を多くのところで取り入れている。総合計画、男女共同参加プランなど。SDGsを共有することで、次にどうしたらいいのかを考えるきっかけ作りになる。
- 17の目標のアイコンを付ければ、取り組んでいるということではなく、これをきっかけに実際に考えてみる必要がある。

#### ○若者支援モデル事業について

- ・蒲郡市の令和3年度主要新規事業に選定。
- ・令和2年度には学生の意識調査を実施し、その結果を愛知工科大学小林先生より、賀詞交歓会にてミニ講演会を実施していただいた。賀詞交換会には、愛知工科大学の学生にも参加いただき、蒲郡の魅力アップ作戦の発表や多様な団体との交流を行った。
- ・交流の中では、学生の発表内容などを意見交換した。グループワークも実施。
- ・来年度は企業紹介動画を作成するが、単なる動画作成ではなく、学生が地域とどう関わっていくのかをカリキュラムとして主導していくことになる。この授業は産学官連携というテーマのもと、行政だけでなくJC・YEGなど地域経済を支えていく方々と連携していきたい。
- ・意識調査をしたところ、ボランティア活動や社会貢献活動への興味関心が少ないことが分かる。ただし、ボランティア活動は学校の科目として設けられてい

るが、単位を取得する学生は少ない。3年生のインターンシップ参加率は8割程。学校や教員との繋がりは強いが、地域社会との繋がりが薄い。学校としても危惧している点である。

- ・ものづくりや工学系の勉学から発展して、ボランティアや地域貢献などの科目内容にシフトしていきたいという学校も考えている。
- ・来年度、動画作成におけるカリキュラムの設定と準備をしていき、地域理解に繋がる映像制作を行っていく。
- 大学の先生とも情報交換しており、今後は地域の企業の方を交えて話を進めていきたい。
- 2～3年前に蒲郡ボランティア協議会と一緒に居場所づくりとして「合同フェスタ」を開催した。その時に愛知工科大学の生徒も参加してほしい旨、相談したことがあるが、大学からは「今の大学生はとてもデリケート」と聞いた。
- 中央通りでの「ごりやく市」に大学生のボランティアが参加してくれている。
- 意識調査からも分かる通り、今の子はボランティアへの興味が薄い。自分の活動に高校生が参加してくれているが、個人的な参加ではなく、ボランティア部として参加してくれているもの。高校生や大学生にボランティアとしての喜びを感じてもらってということまで出来ていない。
- 学習支援などにはたくさんの大学生が参加してくれている。どうしたら、参加してくれる子が熱意を持ってやってくれるのかが気になる。
- 意識調査から思ったより家にいる子が多いという回答が、コロナウイルスからなのかが気になる。学生が学んでいることで地域と結びつくってということと、ちょっとだけ関わるのではなく、愛知工科大学の学生でないと出来ないと期待されている、だから参加した学生にやる気が出るように組み立てる。
- JC が取り組む「若者議会」とも関わる部分が出てくる。若者議会の応募者の中に愛知工科大学の学生が3名。意外と少ないと感じた。学生が考えて、街に活かせる姿が見えてこないからか。考えた政策を実行して、自分の成功体験にしていけるような形がよいのではと感じる。
- シティーセールスでも協働で取り組んでいる。ボランティアといっても、自分に利益があるとか、興味があるものでないと参加する人は少ない。シティーセールスでゾッキに力を入れているが、単純に有名人に会えるとかっていうことからでも参加してもらえたらよい。
- メッセージカードを募集した。市内3校の高校で900枚ぐらい集まった。こちらから発信して、導いていくっていうことも必要。
- 学生のボランティア活動に対する興味が薄れているといってもゼロではないと思う。そういった思いを持った人を集めていけばよい。企業も連携していく必要がある。ARは来年度作ってどこかで発表するのか？
- 発表をし、例えば商工会議所のインターンシップに対する紹介などで活用してほしいと考えている。来年度進めていく上で、連携していきたい。
- 学校側も、学生が他の人と関わるのが苦手といったところが課題であると考え、専門家や多様な分野で活躍する人と学生が話をする機会を持つ「ハッカソン」という取り組みを検討している。
- ボランティア活動、社会貢献という側から学生を呼び込むのは少し異なるかなと感じる。ゾッキの映画もそうだが、最初は楽しいから参加したものが、最終的に市や地域を良くしていくことに繋がっている。「誰かのために」っていう

- のだけがボランティア活動ではなく、自分の好きなことが結果的に人の役に立つぐらいでもよいと感じる。
- 本人は、ボランティア活動やっているって自覚がなくても、結果的にボランティアに繋がっていることもある。愛知工科大学の学生も、自分の得意なことからスタートしてもよいのではないかと感じる。
  - 最近だと、「Code for ●●」っていうプログラミングから関わるものがあるが、やっている人はボランティアの感覚を持ってやっているかといえ、特に意識はしていないと思う。
  - アンケートの設問で「ボランティア活動に取り組んでいますか」は古いように感じる。いろいろな活動は行っているが、本人がどういう認識をしているかの違いであると思う。
  - ボランティアのイメージは、取り組むと内申点が上がるものというイメージがある。今の子がそう感じているのは分からないが。もし同じ感覚であれば、同様にサポートしていくのがよいのかが分からない。好きでやっている、地域に貢献しているのでは結果で異なるが、どちらもプロセスを支援するのが難しいように感じる。
  - 「まちづくりのためになにかしましょう」とは言わないほうがよいと感じる。好きなことをやりながら、いろいろな人と関わることで結果的になればよい。
  - 自分の時は、ボランティアは特別な人がやるものと感じた。
  - 無理やりプロセスを持っていくのではなく、学生が得意なことや学んだことを地域に活かす。産学官の連携の事業としてやっていくことから、先生もある程度想定してカリキュラムを作ってくれるのではないか。
  - 最後の成果物はどうするのか？また、子どもたちの面からいけば、少し年上のおにいちゃん、おねえちゃんに取り組むことで、聞いた子どもがこんな仕事もあるんだという感覚を得やすい。また事業が終わった後の繋がりを持ちながら、話をして応援してあげられるような状態になればよい。
  - プログラミングなどの分野では、子ども達のほうがより親和性を得やすい。
  - 実際に活動しているボランティアからすると、本当に好きなことをやっているだけ。社会貢献したい、人のために役立っているとかは考えておらず、後から付いてくるもの。自分がやりたいことを、できるときに、できることだけやっている。
  - 最近、ワンコインとかちよいボラといった有償ボランティアもできてしまっている。ボランティアが少なくなってきたから、お金を出してでも増やそうといったこともある。
  - コツコツやってきたことが評価されないことも多い。そのため、新しく参加してくれる人も少なく、会員の高齢化に繋がっている。
  - ボランティア連絡協議会に存続の危機が訪れている。今後1～2年で社会福祉協議会にボランティアセンターができると、吸収されてしまいそう。そういった実態も知ってほしい。
  - 3年前ぐらいに、愛知工科大学のスクールカウンセラーから「アルバイトをしたことがない学生を職場体験に連れて行ってほしい」と依頼された。何も経験がない中であり難しいと感じたが、大学生に役割を持たせることが大事なのではないか。大学生が地域に出ることそのものが、社会貢献に繋がるのではないかと思う。大学生に経験を積んでもらうのに、「ボランティアやりませんか？」

- では無理。「●●やるから手伝って」でないと難しい。
- 引きこもり気味だったが子が、「指名されたから学級委員をやった」と言った。大人がボランティアをやってほしいのであれば「●●さんと●●さん、手伝って」と言ったほうがよい。ざっくり学生を集めるのでは難しい。ピンポイントで指名。
  - 企業からのボランティアなどからすると、稼げる（有償）活動もありなのではないか。色々な方の知恵が入り、お金に変わるとなれば学生もはやってみるのではないかとにかく「楽しい」に繋がればよい。
  - 必要とされているっていうことは参加する糸口なるが、一方で自分のやりたいことも入り口ではある。個人的なところから入っていったものが、蒲郡のよりよいところに繋がり、それに自分も関わっていたんだと気づくと広がりが出る。
  - 自分の好きなことだからこそ、自分に投資しながらでもやるが、拡大するとなると個人だけの力だけでなく、人との関わりが必要となってくる。
  - ボランティア活動において、行政などの担当課が分かれておりそれぞれ別々のサポートを行っている。大きな枠組みでサポートしてくれる組織または市役所の担当課ができると、活動する人やサポートするところが多く関わっていける。
  - 今回のモデル事業では、若者が学ぶということだけではなく、若者にどうアプローチしていくのかなど大人や社会が学ぶ面もある。人を誘う時には、誘い方の引き出しが多いほうが誘いやすく、それを大人が学ぶ。
  - どこの課もいっぱいいっぱい、職員不足。困った時に、どこに相談すべきなのか表にまとめて教えてほしいという依頼が多い。
  - ボランティアに関しては、市として縦割り状態でバラバラ。確かに、我々大人も学ぶ部分は大きいのかもしれない。

### (3) まちづくり賞について

- ・コロナでもあり、活動している団体が少ない。推薦団体があれば考えたいが、来年度かけて検討でもよい。
- ボランティア連絡協議会を推薦したい。現在12団体が加入している。このままだとなくなってしまう。
- 国や県から表彰を受けたことがあるか？
- 各団体はあると思うが、協議会としてはない。
- 市の会議にもボランティア連絡協議会の長として、参加した経緯もある。
- 規定により、ネットワーク組織が該当するのかわや功績をどのような形で評価すべきなのも含めて、検討したいと思う。

## 3 その他

- ・実績報告会をオンライン形式で実施。
- 令和3年5月9日（日）午前10時30分から